

巻頭言

早稲田大学人間科学部教授

春 木 豊

人体科学会の趣旨の一つは人間をホリスティックに考えてゆこうということである。ところがこのホリスティックということがどういうことであるのか、よく分からないのである。人間は「心、体、環境などからなる全体的存在である」と認識すべきであるといったことならば、特に目新しいことは何もない。難しくて分からないのはホリスティック(全体的)という認識の仕方(方法)がどういうことなのかということにある。「分かる」のは「分ける」ことであると聞いたことがあるが、確かに科学は分析をすることでいろいろなことを分けてくれた。水とは何か。それは水素と酸素からなる、と言ったたぐいである。

このような分析的な知り方からするならば全体の理解は「全体は要素の集合である」ということである。水素と酸素を化合すると水になるということである。このことは化学実験をやってみると確かにその通りになるので、この考え方の正しさを証明しているように思われる。しかしそうであろうか。水とは何か。あらゆる感覚を通してわれわれはそれを認識しているのでひとことでは表現できないが、少なくともそれは液体と表現される性質を持っている。ということは、ともに気体である水素を知っても酸素を知ってもあの水の本性を知ることにはできないということである。水は水をもって理解するしかないのである。全体は全体であって要素とは異なるということである。水素と酸素から水を作るためには、両者を結合する(足す)のではなくて、化合するのである。つまり両者は化けなければならない。このことは全体は要素とは異なることを意味している。ホリスティックの意味と価値はこのことにあると言える。そこで分析的方法ではなくて全体を全体として理解する方法があるのかということになる。つまり上に述べたようにホリスティックという認識の方法があるのかである。筆者にはこの回答について全く持ち合わせがないのであるが、それでもたとえば複雑系の科学の発展に期待を寄せたりしている。

人間についての全体的認識について少し述べてみたい。人間を心と体に分けて考えるのは常識になっている。純粹に心的なこと、あるいは精神的なことを霊あるいは魂、また両者を合わせて霊魂と表現することがある。人間が死んだとき体から抜け出して行くのは霊魂であって、心ではない。霊魂はそれほど体とは分離した(区別できる)ものなのである。これにたいして、心とはどういう概念なのであろうか。漢和辞典を引いてみて驚くことはまず心臓のことと書いてあることである。心は心臓の象形文字なのである。現代では心はほとんど精神のことと理解されているのであるが、本来は心臓と精神をともに含んだ概念であり霊魂とは異なる概念なのである。このような概念の存在は人間をホリスティックに理解しようとする態度を表していると思える。同様なことは体についても言える。体(肉体)は物質としてのものであり霊魂とは截然と区別できるものである。これに対して身という概念がある。この概念は単に体を意味するだけではなく、例えば「わが身を省みて」といったときには私の全体を指している。そのほか身分といった言葉は社会的なことも意味している。このように体の側面についても心を含んだ概念が存在するのである。それでは最後に心身を統一した全体的な概念は何かということになるが、これは「語りえぬもの」ものかもしれない。しかし筆者はここに気という概念を入れたいと思っている。

人体科学会の目指すイデオロギーは人間の総合的な理解であり、そのためにさまざまな分野の学者や実践家が集まっている大変貴重な集団といえる。しかし、ただ集まっているだけでは面白みがない。また学際的な活動というだけでも新鮮味はない。水素と酸素が化合して水が創造されるように、さまざまな能力を持った会員が化合して何か新しいものを創造してゆきたいものである。このためには会員は自分の殻を破って、化けなければならないと思う。化合の現象を起こすためには、熱や触媒が必要である。人体科学会の趣旨に情熱を燃やしてくれる人材の登場を切に期待している。